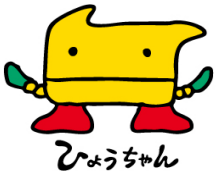
嬉望

第２号
令和６年３月吉日
兵庫教育大学
教職大学院
学校経営コース
編集部
（宇田　眞下）

「嬉望」は、本学加東キャンパスが嬉野台地区にあることと、「希望」とをかけた造語です。



理論と実践の融合

学校経営コース二年生は八月、九月よりインターンシップや佐賀県嬉野市教育委員会での教育行政体験を行いました。また一年生は先進校訪問調査、フィールドワーク中央研修や教育振興計画策定委員会の傍聴等へ参加しました。大学での「理論」と現場での「実践」の融合を確立させるべく、学びを一層深めました。

インターンシップ

静岡県裾野市立富岡第一小学校
静岡県裾野市立東中学校
静岡県裾野市教育委員会
Ｐ２　田代　昌平

八月二十一日から十月二十日までの九週間にわたり、静岡県裾野市立富岡第一小学校（三週間）、静岡県裾野市立東中学校（三週間）、静岡県裾野市教育委員会（三週間）でインターンシップを行わせていただきました。今回、現任地の教育課題である、「不登校」について、教育委員会、学校現場それぞれの立場の視点で調査を行いたいと考え、三ヵ所での実習としました。

期間中は、それぞれの場所で「不登校対策の取組」について参与観察、アンケート調査、インタビュー調査を行いました。調査を分析してわかったこととして、教育行政が提案する施策を多忙である現場教職員が共有・連携していくためには、内部・外部資源を活用して施策を改善していく必要性あることがわかりました。改善プランの提案に向けて大きな示唆となりました。

他にも、教職員の専門性向上のための様々な研修も参観させていただきました。採用から３年までの教員や講師が対象で、教育支援センター（学びの森）の協力のもと行う研修会では、「専門教科指導」「学級づくり」「生徒指導」の教員の資質能力を向上させる取組が実施されており、参加者からは「明日から活用できるスキルを学んだ」「普段の悩みを解消できた」などの感想も聞くことができました。

期間を通して、改めて現在の教育現場は、それぞれの立場の皆さんが精一杯に尽力されて成り立っているのだと感じました。しかしながら、困難な課題も多く山積しており、現場で働く教職員への様々な負担は大きいままです。そのような負担を軽減できる一つの策として、改善プランを提案していくことが、私の現任地への恩返しであると考えます。

今回多様な学びの機会をくださった全ての方に感謝申しあげます。

兵庫県立兵庫工業高等学校
Ｐ２　西本　和樹

八月二十一日から十月十三日までの約二か月にわたり、現任校である兵庫県立兵庫工業高等学校でインターンシップを行いました。実施にあたり、メンターである校長から「インターンシップ期間中は、管理職として自分ならどうするかといった視点を持つこと」との指導を受け、すべての教育活動を自分事とする視点を持つことで、これまでとは違った学校活動の見方や捉えをすることができました。

管理職シャドウイングを通じて、学校経営や組織づくり、人材育成など管理職としての学校マネジメントの具体について学ぶことができました。特に、教頭業務については、事務処理をはじめ多岐にわたる業務の観察と補助作業に携わらせていただき、各種の調整方法や教員への指導・声掛けなどのコミュニケーションのとり方について学ぶことができました。管理職打ち合わせをはじめとしたあらゆる会議・委員会に参加させていただき、会議運営の中での情報共有と意思疎通を図る様子を学ぶことができました。

学校外部の機関や関係団体等との連携や調整方法の理解についても、近隣施設との工作教室を通して、教職員や生徒たちの関わりについて観察させていただきました。また、育友会（ＰＴＡ）の役員会及び理事会に参加させていただき、同窓会事務局の方からお話をうかがう貴重な機会もいただきました。

インターンシップが有意義な学びの場となるようにと、校長から多大なご配慮をいただき、希望した経験活動を全部させていただきました。ご寛大に対応してくださったことに心から感謝いたします。この度の学びの成果を兵庫の教育に還元できるよう、一層精進いたします。ありがとうございました。

嬉野市教育行政体験

佐賀県嬉野市教育委員会
Ｐ２　河上　慎一朗

十一月十一日、行政体験を行うため佐賀県嬉野市を訪れました。

翌十二日の日曜日に行われ

た、全国的にも珍しい「嬉野教育の日」というイベントを皮切りに一週間の行政体験が始まりました。以前、大学院の講義で杉崎教育長からお聞きした不登校対応コーディネーターや早期支援コーディネーター、オンライン英会話の取組等について、担当者の方から詳しく教えていただいたり、実際の様子を見学させていただいたりしました。また、表簿点検、地域コミュニティーの方々との花の苗植え、学校運営協議会の熟議等へも参加させていただきました。その他にも、学力向上に向けた小中連携の取組、教育予算、水泳授業支援事業（民間プールの活用）、社会教育と学校教育の関わり、さらには嬉野市の歴史についてまで、とても多くのことを学ばせていただきました。

学びの多さに反して、一週間はあっという間でした。その理由はもちろん、杉崎教育長や教育委員会の方々があたたかく接してくださったからです。お忙しい中にも関わらず、様々なことが学べるよう課内に席を用意してくださったり、あたたかい声掛けをしてくださったりと、言葉では言い尽くせないくらい感謝の気持ちで胸がいっぱいです。

一週間の行政体験を終え、私が教育で一番大切だと感じたことは、「人のあたたかさ」です。私は、教育委員会の方々が、あたたかく接してくださったことで、私も「嬉野市教育委員会の人達のようになりたい、同じようにそれを誰かに返すことができるような人になりたい」と思いました。人にあたたかくしてもらったことで、誰かにあたたかく接したくなる、当たり前のことではありますが、そこを大切にした教育をしていきたいと強く思いました。最後になりましたが、このような機会を設けてくださいました、嬉野市教育委員会の方々を始め、兵庫教育大学大学院関係者の方々に感謝申し上げます。本当に貴重な機会をありがとうございました。

フィールドワーク

第三期猪名川町教育振興基本計画策定委員会（第１回）

Ｐ１　大川　倫弘

十一月二十八日（火）に、Ｐ１二名は猪名川町教育委員会にて行われた表記の会議を傍聴させていただきました。

私は教育振興基本計画策定に係る会議を傍聴させていただくのは自治体としては２つめ、会議としては３回目でした。自治体によっては、会議自体が粛々と進むことがありますが、今回見せていただいた猪名川町の策定会議の傍聴では、その会議でしっかりと話し合って決めようとする姿が見られ（各委員の方々もふるさと愛があふれています）、傍聴しているだけでなく参加したくなってしまうことも多くありました（猪名川町は昨年度までの勤務校がある自治体ですので、私の思い入れもひとしおですから）。

今回は第一回ということもあり、まず策定に当たっての提案や町の現状や課題の説明があり、それに係る意見を委員に求めるかたちでしたが、委員から前文に当たる内容に「ワクワクしない」という意見が出たことを皮切りに、国や県の方針を参酌しながらも、猪名川の未来をワクワクしながら考えて良いことが許され共有されたように思います。意見が出されたときは、会場に緊張が走りましたが、今思うとあの質問がブレイクスルーとして機能していたと思うことができます。教育長のお人柄もあり、実際にそれ以降は徐々に議論が活発化し、各委員が各お立場や役割に立脚した自分の意見を述べ出したように感じました。令和７年度から５年間の指針となる教育振興基本計画ですので、各委員の責任は重大ですが、その責任にワクワクして能動的に関われることを許し共有できたことは、教育だけでなく地域活性化にとっても大きなことだったのではと思います。

VUCA の時代と言われて久しくなりますが、VUCA は工夫に高い自由度が許されていると捉えることも出来るかもしれません。地方行政は現状に基づき自由に羽ばたいてよい、いはんや学校においてをや、ということなのでしょう。私自身もワクワクして大学院の学びを進めていきたいと思います。

ひょうご学力向上研究事業第２回グループ会議

Ｐ１　大上　聡

十月十八日に兵庫県立西宮高等学校で行われた「ひょうご学力向上研究事業　第２回グループ会議」を傍聴させていただきました。これは、研究成果の発表の一環として行われ、指定校以外からも多く参加し、活発な協議が行われました。

キャリア教育推進部長からは、本事業の目標「３年次の課題研究において、生徒が SDGs の実現に向けたテーマ設定を行うための教科横断的な指導方法を開発する」に向けた３年間の取り組みや総合的な探究の時間の「リサーチ」や「課題研究」についてご説明を頂きました。

研究授業では、普通科・音楽科の生徒が合同で「リサーチ」に取り組んでいる様子を見させていただきました。西宮市役所や地元企業の方々に、地域のまちづくりや SDGs をテーマにした講義をしていただき、その後は World Café 形式で対話しながら各グループで気づきや意見をまとめます。一定時間が過ぎると、参加者は他の Café へ移動して、さらに意見交換を行います。少人数での対話を繰り返すことで相手の意見を聞きやすく、自分の意見も言いやすい雰囲気で進められていきます。出された意見や視点を共有し、ルーブリックによる自己評価を行っていました。音楽科と合同に変更されたことで、様々な視点からの意見交換になったそうです。

研究協議では、参加者から運営体制や外部人材について多くの質問が出されました。また、校長先生からは、担当者同士が何事にも協力し合い楽しく取り組んでいる様子が伝えられました。

探究活動では、外部との調整に多大な労力がかかりますが、校内の組織体制がしっかりとしていることで、円滑な実施が行われているようでした。探究活動について多くの学びを得ることが出来ました。

つくば中央研修（副校長・教頭等研修）

Ｐ１　藤野　浩司

八月二十四日に、茨城県つくば市の教職員支援機構（ＮＩＴＳ）で行われている副校長・教頭等研修にオブザーバーとして参加しました。本研修は八月二十一日から二十五日までの五日間、集合型研修として行われており、各教育委員会の推薦を得た副校長・教頭・指導主事の一七五名が全国各都道府県から参加されていました。

私自身は、以前つくば中央研修をオンライン型で受講した経験はありましたが、今回対面で行われている様子を初めて見させていただく中で、教職員支援機構の職員の方々や受講者と話をする機会が持て、改めて対面で行うことの意義を実感しました。それと共に、全国から集まる副校長や教頭、指導主事が、実際にどのような実務上の課題に直面しておられるのかということを目の当たりにして、大学院の講義で学んでいる学校組織マネジメントや人材育成の学びをさらに深め、実践に活かすための示唆を得ることができたと感じます。

研修プログラム内容は、学校マネジメント、学校改善、実践開発についてなど多岐にわたります。当日は、「学校ビジョンの構築」についての研修を見させていただきましたが、ＳＷＯＴ分析や自校の学校経営計画についてグループ演習が行われていました。受講者の多くが、ビジョンを教職員に浸透させることや実践の中核をなす人材の育成について、悩みや課題意識をもち、向き合っている様子が伺えました。

研修での話しや演習の様子を伺い、学校組織マネジメントや学校経営計画（ビジョン）づくりで、私が改めて考え、感じた心に留めるべき三点として、まず一点目は、「目指す学校像を明確化すること」が挙げられます。そのためにも、校長のビジョンをいかに教職員にわかりやすく伝えていくか。その上で、教職員のベクトルを合わせる。副校長・教頭として教職員をまとめる大切な資質・能力であると実感しました。

二点目は、「児童生徒への教育成果に結びつくこと」です。当然かもしれませんが、そのためには、取組みのアウトプット（結果）を読み解き、アウトカム（成果）に結び付けていく意思決定の必要性。定期的に検証しながら判断していく能力を高めていかないといけないと感じました。

三点目は、「キーパーソンを育成すること」を挙げます。実践ではOJTが中心になってくると思いますが、ビジョンと連結した取組みを、学校運営の中核となるキーパーソンとしての成長と成果を同時に実現させていく体制をつくり、学校組織として育成する視点をもって教職員と関わり、声を拾っていくことが大切であると考えます。

今回参加して、研修全体を俯瞰して見るなか、副校長・教頭による職務遂行のポイントは　「校長の視点で考えること」にあるのではないかと考えました。その視点を持つことにより、校長への適切な助言や情報提供を行うことができ、実践的かつ総合的な学校経営力が培われることにつながると思いました。

研修や教職大学院での学びを、実際の副校長・教頭による職務遂行に活かすことの重要性に気付かされました。これからも実践を視野に入れ学修に励んでいきます。

先進校訪問調査

De phoenix Jenaplan school

Ｐ１　阿賀　研介

派遣元の芦屋市の目指す個別最適化、現在勤務している兵庫教育大学附属小学校の授業力をより高めるヒントを得るためにオランダの De phoenix Jenaplan school というイエナプランスクールに訪問させていただきました。

異年齢で、それぞれの課題に取り組む姿をみて、子どもたちが自然体であると感じました。異年齢という違いが前提にある環境が作用しているのか、わからないことは先生以外の周りの友だちに聞くのが当たり前という雰囲気でした。また、先生に与えられた課題をするのではなく、自分たちで決めている課題を取り組むので、子どもたちにさせられているという受け身の感情は感じませんでした。

芦屋の髙島市長のおっしゃる「ちょうどの学び」を具現化している姿でした。この授業の根っこにある考え方は、芦屋市の子どもの実態にも合うのではと考えています。根っこにあるものは、「子どもに寄り添う」「どの子も大切にする」ということだと思います。それはすごくシンプルなことですが、でも実は「し続ける」ことが難しいことでもあると思います。オランダの小学校でそれぞれのペースで学んでいるのも、どの子もそれぞれ違うという考え方を大事にしているからです。兵庫教育大学附属小学校でも、授業においてよく発言をする子、あまり発言しない子に関わらず、「どの子も大切にする」ということを実践していくことで、子どもたちがもっとイキイキとすると思います。

「授業の目的」という根っこの部分の大事さを、今の僕の立場で還元していきたいと考えています。

岡山県健康の森学園支援学校
旭出学園
神奈川県立総合教育センター
筑波大学付属久里浜特別支援学校
（独）国立特別支援教育総合研究所
兵庫県立高等特別支援学校
Ｐ１　宇都宮　ますみ

私は、九月から十一月にかけて、兵庫県、岡山県、東京都、神奈川県で計六カ所の先進校を訪問させていただきました。特別支援教育に関わる先進校ならではの取り組みを知ることができ、大変勉強になりました。

まず、東京都の学校法人旭出学園は、上野一彦先生が理事長をされている私学の特別支援学校です。学校内に教育研究所を設け、実践と研究の両輪を理念に知的障害児の教育が行われています。細かい質問に対し、丁寧に答えてくださいました。

神奈川県は、筑波大学付属特別支援学校、神奈川県総合教育センター、国立特別支援教育総合研究所に伺いました。

筑波大学付属特別支援学校は、知的障害を伴う自閉症のある子どもの最適な学びを実現する取り組みを学びました。

神奈川県総合教育センターでは、三十年前から特別支援学校等アセスメント事業を研究開発し、教育行政から学校現場にアプローチする体制が整えられていました。

国立特別支援教育総合研究所は、浅野特任教授のご紹介で訪問することができ、特別支援教育に携わってきて、ある意味憧れの地に行くことができ、感慨無量でした。障害種別ごとの研究を拝見し、特別支援教育に対して新たに気の引き締まる思いです。

先進校訪問は私にとって大変貴重な経験になりました。そこで出会った先生方とつながりを持つことができ、遠くても訪問させていただいてよかったと思います。思い立ったら行動することで、新しい取り組みを知ることができました。教わったことを兵庫県に持ち帰り、微力ながら特別支援教育の組織づくりに力を注いでいきます。

静岡県伊豆の国市教育委員会
兵庫県播磨町教育委員会
兵庫県加古川市教育委員会
神奈川県横浜市教育委員会
静岡県市掛川市教育委員会
兵庫教育大学附属小・中学校
Ｐ１　長田　有樹

現任校の課題を解決すべく、「働き方改革」と「部活動の地域移行」をテーマに先進的な取り組みを行う７つの学校及び教育委員会を視察しました。

兵庫教育大学附属小学校では、変形労働時間制を導入し、繁忙期の教員の勤務時間を長く設定することで仕事の時間を確保していました。また、教員の一人一人の希望に合わせた勤務開始時刻と終了時刻を設定し、早番と遅番で仕事の分担をしていました。休憩時間もきちんと設定されていたので、一日の中で教員が休む時間が確保されていました。兵庫教育大学附属中学校でも小学校と同様の取り組みがみられましたが、平日の部活動を教員の勤務時間内に設定したり、休日の部活動に外部人材を積極的に活用したりする中学校独自の働き方改革もみられました。下呂市教育委員会（岐阜県）は、令和３年度から年間授業時数や教育課程を工夫し、平日の部活動を教員の勤務時間内に設定し、教員の働き方改革を推進していました。また、令和６年度から土日の部活動も地域移行するための計画を立て、実現するために行政や地域と連携し、人材（指導者）や財源（指導者への謝金等）を確保していました。掛川市教育委員会（静岡県）では、「部活動を完全廃止」という明確な目標を立て、平日も休日も全て地域クラブへ移行する準備をしていました。令和８年度には、学校から部活動がなくなるという大胆な取り組みでした。伊豆の国市教育委員会（静岡県）は、下呂市教育委員会の取り組みを模範として、本年度から年間授業時数や教育課程を工夫し、平日の部活動を教員の勤務時間内に設定し、教員の働き方改革を目指していました。加古川市教育委員会は、文化庁委託事業を活用し、文化部（吹奏楽部）の地域移行に取り組んでいました。活動場所がグラウンドや体育館ではなく、学校内の特別教室なので、セキリュティ面で多くの課題がありましたが、モデル校での活動を開始していました。播磨町教育委員会は、NPO 法人のスポーツクラブ２１はりまと連携し、「社会教育」「学校教育」「社会・学校教育」の３つに分類し、少しずつ地域移行できるように工夫していました。令和８～１０年までに部活動を完全に地域へ移行する方針でした。

７つの学校及び教育委員会を視察する中で、生徒や保護者だけでなく、教員も地域住民も納得できるウェルビーイングな学校づくりを目標とし、その手段の一つとして「働き方改革」や「部活動の地域移行」に取り組む必要があることに気がつきました。

岐阜県立可児高等学校
Ｐ１　木下　和成

十月十一日に岐阜県立可児高等学校を訪問しました。可児高校は、二〇一三年ごろからアクティブラーニング（以下、AL）の望ましい在り方を模索し、生涯学習的観点で地域のリアルな課題に対し生徒が地域課題を解決していく活動に注力し、「総合的な探究の時間」（以下、総合探究）導入のかなり前から地域の課題解決や地域づくりに関わってきた高校です。これまでの教育活動、特に課外活動での経験や蓄積されたノウハウ、総合探究のカリキュラムや組織体制などから学ぶことが、現任校の総合探究の改善や充実に向けて必要と考え、訪問先として選定しました。

可児高校の総合探究は、一・二年生合わせて二十名程度（一年生はグループ探究、二～三グループ、二年生は個人

探究、十名程度、一人の教員が付く形態）を一つのゼミとして実施しています。普段は各グループ、個人で研究を進めますが、定期的に互いに発表し、一年生は二年生からアドバイスをもらうのが興味深い特徴です。訪問した日は、中間発表の日でした。各ゼミで、二年生は一年次の経験を踏まえて、一年生に鋭い指摘や改善点をアドバイスしている姿を拝見することができました。教育活動の中で先輩が後輩を育てるという伝統が、脈々と受け継がれており、探究活動の質の向上に大きく寄与しているのだと感じました。

校長先生とのお話の中で、「教員が教え過ぎてはいかん。特に総合探究においては、ファシリテーターに徹し、長期的な視野をもって、生徒が探究していく過程でどのような力が身に付いたかを丁寧に見ていくことが大切なのではないか。」というお言葉が印象に残っています。総合探究が教員の負担となっている状況での教員の専門性に起因する教え過ぎに対する指摘と、持つべき大切な視点について、大きな示唆をいただきました。

訪問に際しお忙しい中、校長先生をはじめとして多くの先生方に対応していただき、大変ありがとうございました。

学校経営コースでの学び

P1　宇田　毅

一年次では、教育実践研究、いわゆる改善プランに向けた研究やフィールドワークとともに、専門科目では、教育行財政・法規に関する領域、学校組織開発に関する領域、学校経営実践に関する領域についてといった学びもあります。いずれも学校経営を行う上で、欠かせない内容であることはいうまでもありません。この中で、教育行財政の学びについて振り返ってみたいと思います。

この授業では、大きく三つのことを学びました。まず、教育委員会という制度や組織、自治体組織と教育委員会の関係や、教育行政がどのような仕組みで行われるのか、といった「教育行政制度」について。次に、学校における人材の供給、配置や管理、教育を取り巻く環境の変化が学校マネジメントにどのように影響を与えるのか、教育課程に地域の政治（要望）がどのような影響を与えるのか、などの「人材・教育課程のマネジメント」について。そして、国・県・市町村が教育予算をどのように分担しているのか、教育費の補助がどのようなきまりや仕組みのもとでなされているのか、自治体の財政状況と教育予算の関係、といった「教育財政・学校財務」についてです。

私はこれまで、学校と教育委員会、教育委員会と自治体の関係について考える機会をほとんど持つことがありませんでした。しかしながらこの授業を通して、制度、人、組織、財政といった要素が学校を円滑に運営していくには必要不可欠であることを改めて学びました。そして、ここで得られた知見を現場に帰った後の職務に役立てたいと考えました。

今回ご紹介した内容は一部でしたが、このように、兵庫教育大だからこそできる学びを日々積み重ねることができました。残りの修学期間を大切にしながら、鳥取県に資する学びや研究をさらに深めていきたいと、この一年を振り返りながら志を新たにしました。

P1　眞下　英彦

「現状では残りの教員生活で、立場や年齢にふさわしい仕事ができない」という思いを持っていた時に、教職大学院で学ぶ機会をいただくことができました。何十年か振りの学生生活となり、現代に相応しい学びのスタイルを体験しました。最も大きかったのは、ICT を活用した学びでした。令和の日本型学校教育として「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び」が示されています。その手立ての一つとして、ICT の利活用による特別支援教育の質の向上が挙げられます。ICT 活用の講義だけでなく zoom を活用した講義の受講、また Teams や Forms を活用した連絡ややり取り等、困った時には仲間の支援を受けながら、スキルの向上を図ることができました。

印象に残っている学びの一つが、「先進校訪問」です。「業務に忙しい中、受け入れてくれるのだろうか」と不安の中連絡を取り、訪問依頼の承諾をいただいた際には本当に安堵しました。訪問当日には温かく迎えてくださり、課題研究に必要な多くの情報を得ることができ、勤務しながらでは実施しにくい貴重な学びの場となりました。将来私が逆の立場となる機会があれば、同様に温かく迎え情報提供できるようにしたいと考えました。他府県であっても、教師としての繋がりのようなものを感じることができました。

最も重要な学びが、修了課題となる「学校改善プラン」です。現任校だけでなく、特別支援学校の今後の課題やその改善を考えるために、現任校だけでなく他校も含めたグランドデザインや学校概要、県の施策や学習指導要領、先行研究論文等をこれまでと比較にならないくらい深く読み込み、新たな知見を得る日々を送っています。来年度成果としてまとめ、兵庫県の特別支援教育の向上に少しでも資するようにできればと考えています。

≪編集後記≫

今年度も外部での学びをたくさん積むことができました。それもすべて受け入れ先の方々のご理解があってのことです。そのことを忘れず、感謝の思いを胸に引き続き研究に邁進していきたいと思いました。